

Title	聖地紀行(占部百太郎著, 大岡山書店発行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.2 (1931. 6) ,p.169(327)- 169(327)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310600-0169">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310600-0169</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 書

# 評

## 聖地紀行

(占部百太郎著)  
大岡山書店發行

本書は占部博士が昭和四年の秋「聖地」を中心とした地中海沿岸各地を旅行された時の記事であつて、旅行の動機とその用意から筆を起し、マルセイユ出發、ナポリ、ボンペイのイタリアから、アテネ、サラミスのギリシヤにうつり、更にコンスタンチノープル、スミルナ、ローツ島、メルシナを経て、ベイルート、ドッグ、リヴァー、パールベック、ダマスクス、タイベリアスミカパアナウム、カナ、ナザレ、ハイファとカーメル山、ナブルス、セルサレム、ベスレヘム、ゼリコなどの聖地方を巡遊し、更に南下してカンタラからエジプトに入り、カイロ、アレクサンドリヤからマルセイユに歸來するまでの大旅行の見聞を日記體に叙述されてゐる。そこにはエジプト、アッシリヤからギリシヤ、ローマにいたる古代文化の展望や、イエスを中心とするヘブライ宗教の回顧があり、更に聖地に於ける史蹟發掘の視察や、或は現下の重大な民族問題たる Zionist の運動についての論評がある。なにしろ西洋文明の發源地であり、『乳と蜜の流るる地』として古代民族の憧憬の地であつたこれらの地方は、西洋史の専門家はもろろんのこと、一般の人々にさつても、最も興味あるところとして、大いにその

旅情をそよるのであるけれども、種々の困難のために實際に踏査する人は極めて少く、その紀行文のごさきに至つてはなほ更少い。評者もまた見學の希望をもちながら、果し得なかつた一人であつて、せめて興多き紀行文にでも接したいと思つてゐたところ、今本書によつてその渴望を満すことのできたのは誠に幸である。卷中鮮明なる寫眞版が多数あり、今後の流行者にさつてよき指針であるさきにも、また鎖夏の好讀物としてふさはしく、附録の「大憲章とランニミード」と「再び英國に直面して」の二編もまた、博士の英國通を示すところの味ふべき旨である。(松本芳夫)

## 雜誌『郷土研究』の再刊

大正二年二月から大正六年三月まで、僅か四ヶ年の間にすぎなかつたけれども、『郷土研究』がわが學界に與へた影響はおびただしいものであつて、その功績はいまさらこゝに喋々するまでもない。今日わが國にも郷土研究家或は民俗學者が數多く現はれ、誠に斯界の盛大を思はせるけれども、それらの學者達も皆直接間接『郷土研究』の指導や刺戟をうけたものさ言つて過言でない。それが編輯者の都合で一旦休刊してゐたところ、十數年を経て再び復活したことは、わが學界のため誠に慶賀にあらず、衷心からその發展を祈る次第である。第五卷第一號には、石手紙考(藤原相之助)、おしら神の考察(田村浩)、馬首飛行譚(佐々木喜善)、第二號には、襦衣考(宮本勢助)、坂田金時(松岡靜雄)などの諸論文を始め、